

はじめに

二〇二三年は親鸞聖人のご誕生から八百五十年、また、翌二〇二四年は浄土真宗が開かれてから八百年という記念すべき節目であります。浄土真宗本願寺派（西本願寺）では、「親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要」をお勤めいたします。

このたび、この法要を機縁として、念仏者として生きる意義を再確認するとともに、仏法が現代社会の問題やこれからの時代にどう貢献していけるのか、その可能性を示し、これまで仏教にご縁のなかった方をはじめ、広く宗門内外に発信するため、本書『新時代の浄土真宗』の発行を企画いたしました。

本書は三部構成となっており、第一部では、西本願寺第二十五代大谷光淳（専如）門主が示された「念仏者の生き方」、「私たちのちかい」、新しい「領解文」（浄土真宗のみ教え）をいただき、念仏者である私たちが、人びとの苦しみに共感し、積極的に社会にかかわっていく姿勢を表します。

第二部では、その基本姿勢のもと、現在に至るまで宗門が取り組んできた、平和、いの

ち、環境など、さまざまな社会課題に対する現状と、課題を通して仏法に基づき、自他共に心豊かに生きることのできる社会の実現への貢献について考えます。

第三部は、宗教学者として強い発信力と影響力のある^{しやうてつしやう}釈徹宗さん、評論家・コメンテーターとしてさまざまなメディアで活躍する^{みやまひろや}宮崎哲弥さんをお招きし、これからの時代において仏教・浄土真宗が果たしうる意義や可能性、期待、要望から、仏教・真宗が各界と協働し何を成しえるのか、これからの時代の念仏者に求められることについて学びを深めていきます。

本書が、これからの時代の宗教を考え、仏法とともに生きるひとつの指針になれば、望外の喜びです。

新時代の浄土真宗 目次

はじめに 1

第一部 み教えに生き方を問い聞く みつい しゅうじょう 城

第一章 「生き方」を課題とすることの意味と意義

浄土真宗という生き方 14

他人と比べない幸せ 20

内面から変わっていくもの 21

悪をつつしむ身へ	23
返しても返しきれない	26
煩惱の暴走を止めるもの	28
「南無阿弥陀仏」のはたらき	30

第二章 ご門主の教示

第二節 「念仏者の生き方」に学ぶ

仏教が伝えること	36
ありのままの姿	38
真実に気づかないのはなぜか	40
親鸞聖人の求道	41
生き方が変えられる	44
煩惱とともに歩む	46
現代社会の課題	48

着実な歩みへと 50

第二節 「私たちのちかい」に学ぶ

第三節 新しい「領解文」(浄土真宗のみ教え)に学ぶ

第三章 「生き方」を問うとは？

「非僧非俗」の生き方	76
過去の先人たちの営みを知る	78
「出家主義」ではないことの意味——第二部への橋渡しとして	80

第二部 宗門のいま

序にかえて——「ともに」と「まま」から考える仏教の実践

藤丸智雄

84

屋根を修理する僧侶たち 84

「ともに」という言葉 86

実践は死後にも続く 87

「まま」という言葉 89

「ありのまま」の仏教的な意味 92

諸行無常という「ありのまま」 93

基準を求めつづけてやまない心 95

自ら作り出す価値観に縛られる 96

「死にたい」というありのまま 97

方言となった仏教語 100

地球の未来のために、私たちができること

——環境問題といかに向き合うか 高橋一仁 103

地球温暖化問題の現状 103

なぜ地球温暖化の解決は難しいのか 105

私たちにできることとお寺の役割 108

おわりに 109

同性婚と浄土真宗の歴史 藤丸智雄 111

同性婚をめぐる動向 111

同性婚に関するアメリカ浄土真宗の先進的取組 113

ジョージ・タケイさんの同性婚 114

十方衆生の倫理 116

築地本願寺でのパートナーシップ婚 118

孤独死を問い直す——望まぬ孤独と、宗活のすすめ

加茂順成

120

すぐそばにある孤独死 120

孤独死の何が問題なのか? 121

都会と田舎、どちらが孤独? 122

独居高齢者を見守る寺院・僧侶 123

孤独死対策としての「終活」 124

宗活で孤独感をやわらげる 127

自死・自殺の苦悩に関わる現場から

安部智海

129

浄土真宗本願寺派の取り組み 129

認定NPO法人 京都自死・自殺相談センター(愛称SOTO)

132

仮設住宅居室訪問活動のこと 133

浄土真宗本願寺派の社会貢献とは 136

「ドキュメンタリー沖縄戦」に込められた願い

——世界の恒久平和をめざして 香川真一 139

「ドキュメンタリー沖縄戦」の反響 139

託された願い 140

沖縄の方々との出会い 141

平和を願い、ともに歩む 144

語り継いでいくということ 146

自他共に心豊かに生きることのできる社会へ 148

平和に向けた宗門の歩み

富島信海

150

浄土真宗と「平和」 150

戦争協力 151

戦後の取り組み 152

戦後五十年〜「戦後問題」への取り組み

153

戦後七十年〜「平和」を語り継ぐために

154

子どもたちの笑顔のために——貧困克服に向けた歩み 岡崎秀麿 おかざきひでまろ

基幹運動から実践運動へ 161

貧困の克服に向けて 165

実践目標と具体的な活動 169

これからの葬送儀礼 溪 たに 英俊 ひでとし 172

お葬式は要らないのか? 172

浄土真宗のお葬式とは 175

亡き人をご縁として 179

これからの浄土真宗のお葬式 180

結びにかえて——「つながり」を問い返していくために 寺本知正 てらもとちひまさ 182

第三部

これからの時代における 仏教、浄土真宗が果たしうること(鼎談)

伝灯奉告法要ご親教「念仏者の生き方」に見るこれから取り組むべきこと 193

仏教者、念仏者らしい自己抑制が大きな意味を持つ 200

社会の隅々に入り込んでいく気風を持った宗派 208

時代に即した新しい中間共同体 重所属できるコミュニティへ 216

孤独にも耐えうる「個」の強い心を育てていく 222

世間を相対化する、異物性を失わない浄土真宗の考え方こそ仏教の本義 225

仏教徒が連綿と抱くゆるやかな同盟が戦いを阻み平和を育む 230

SDGs、経済成長と格差、山積する問題にどう対処すべきなのか 237

ご先祖に思いをはせこれから生まれる生命に心を延ばすそれが人間の責務 239

第一部

み教えに生き方を問い聞く

— 満井秀城 みつゐしゅうじょう

本文中、『浄土真宗聖典（註釈版）第二版』（本願寺出版社）の引用につきましては、『註釈版聖典』と略記しております。

第一章

「生き方」を 課題とすることの意味と意義

浄土真宗という生き方

浄土真宗においては、私たちの生活規範について、「くでなければならぬ」と規定するものはありません。しかし、念仏者が何も変わらないのかというと、決してそうではないでしょう。ある青年が、こんなことを言っていました。「うちのお婆ちゃんは、よくお寺にお参りしているのに、家ではお母さんにひどく当たる。だから僕は念仏が嫌いだ」と。息子さんにとっては、お母さんへの身びいきがあるかも知れませんが、それを差し引

いても、とても考えさせられる話です。

念仏者となっても、何も変わらないのでしょうか。確かに「煩惱具足」の身であることは、死ぬまで同じでしょう。「具足」とは、何ひとつ欠けることなく、すべて持ち合わせているということです。つまり、私たちは、「煩惱」と名のつくものは、すべて持っているということ、言わば「煩惱の総合デパート」です。宗祖親鸞聖人の『一念多念文意』というお書物に、

無明煩惱むみょうぼんのうわれらが身にみみちみちて、欲よくもおほく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむむころおほくひまなくして、臨終りんじゆうの一念いちねんにいたるまで、とどまらず、きえず、たえず

〔註釈版聖典〕六九三頁

わたしどもの身には無明煩惱が満ちみちており、欲望も多く、怒りや腹立ちやそねみやねたみの心ばかりが絶え間なく起り、まさに命が終ろうとするそのときまで、止まることもなく、消えることもなく、絶えることもない

とお述べになるとおりです。しかし、本当に、何も変わらないのでしょうか。法然聖人は、ご自身のことを、「極悪最下の凡夫」と仰っていますが、客観的には、そんなはずはありません。

本願寺の第八代宗主・蓮如上人の語録である『蓮如上人御一代記聞書』の中に、

尼入道のたぐひのたふとやありがたやと申され候ふをききては、人が信をとる

（『註釈版聖典』一二六二頁）

文字も知らない尼や入道などが、尊いことだ、ありがたいことだと、み教えを喜ぶのを聞いて、人々は信心を得るのである（『蓮如上人御一代記聞書（現代語版）』六八頁）

とのお言葉があります。念仏を喜ぶ、その姿を他人が見た時、「お念仏とは、なんと尊い生き方なんだ」と感銘を与え、それが、人々に信心を届けるはたらきになるといふことを述べておられます。

先ほどの親鸞聖人の言葉に戻して考えてみますと、親鸞聖人は、ご自身のことを、極め

て厳しく見つめる方でした。仏さまの真実に気づいた身としては、自らのいたらなさ、恥ずかしさに悲歎せざるを得なかったのです。

主著である『顕浄土真実教行証文類』（『教行信証』とも通称）は、阿弥陀仏のはたらき（仏力・仏徳）を、ほめ讃えることを目的に書かれていますから、私たち衆生の側（機受）の記述は多くないのですが、それでも、例えば、「信文類」には、「現生十益」として、信心恵まれた者の利益について、次の十種を述べておられます（『註釈版聖典』二五一頁）。

・冥衆護持…「冥衆」とは、直接的には「天地の神々」を指しますが、「冥」は「暗い」

という意味ですから、私たちの目に見えないものと言えるかも知れませんが、私たちは、何か原因のわからない不幸に出合うと、「罰ではないか」、「祟りではないか」と、目に見えないもののせいにして怯えてしまいますが、迷信を含め、そういうものへの恐怖に怖れる必要はないという利益です。

科学が発達している現在でも、「4」は縁起が悪い、「友引に葬式をしてはいけない」などの迷信に縛られています。そういう迷信に縛られないの

も念仏者の特権です。

・**至徳具足**…念仏者は、阿弥陀仏の救いのはたらきによって念仏申す身になれたのですから、そこには自ずと阿弥陀仏の、この上ない功德が備わっています。

・**転悪成善**…私たちは、自分で悪を消すことはできませんが、阿弥陀仏のはたらきによつて、善へと変え為されます。

・**諸仏護念**…念仏者は、あらゆる仏に、つねに護られています。諸仏にとつて、阿弥陀仏はまことに尊いからです。

・**諸仏称讃**…念仏者のことを、あらゆる仏が、ほめ讃えてくださいます。諸仏は阿弥陀仏を讃え、阿弥陀仏のはたらきが私を通して活動しているからです。

・**心光常護**…念仏者は、常に阿弥陀仏の光のはたらきによつて護られています。普段、このことを実感するのは少ないかも知れませんが、例えば、悲しい時や、つらい時、あるいは腹が立った時などに、お仏壇のまえで静かに手を合わせると、なぜか心が和らぐ、そういう経験をお持ちの方も多いかと思えます。私たちにとつて、安らぎの居場所が、このお慈悲の中なのです。

・**心多歡喜**…念仏者には、歡喜の心が恵まれます。

・**知恩報徳**…念仏者は、阿弥陀仏の広大なお徳に気づかせていただくのですから、それ

に報いる報謝の身へと育てられます。私たちの欲望には限りがありませんから、いつまでたつても「あれが足りない」、「あれが欲しい」という不平・不満の毎日ですが、ご恩を知る身に育てられることによつて、「ありがたい」、「もつたない」という日々が変わるのです。

・**常行大悲**…私たちは、日頃、自分勝手に自分中心の生き方しかできませんが、念仏申すことで、念仏の尊さを体現し、阿弥陀仏のような大慈悲のはたらきをさせていただくのです。

・**入正定聚**…念仏者は、いつまでも永久に迷い続けるのではなく、この世の命を終えた時には、必ずさとりを得るといふ安心が恵まれます。

このように、念仏者には、この身この世において、多くの利益が恵まれると言われています。ただし、世間でイメージされているような、いわゆる現世利益ではありません。なぜなら、いわゆる現世利益の多くは、自分中心の欲望充足を目的としていることが多いからです。自分の望む幸せは、えてして他人と比べた上で感じているものです。ある人の譬えに、次のような話がありました。その人は別の内容で使っておられましたが、私には、この場面のほうが適切かと思ひ、次の譬えに用います。